

「世界の平和を考える」シリーズ 第8回

香港の昔と今

杉浦 正紀

香港が中国へ返還されてから24年が経ちました。

私が香港へ赴任したのは、返還（1997年）前の1990年から1992年の2年間でしたが、当時の香港はまだイギリス統治下で広さは東京23区より狭い土地に573万人の人々が平和な生活を送っていました。

あらゆる中華料理（広東、北京、四川、満州料理等々）がおいしく食べられ、休日の夜となるとマンションのあちこちから麻雀牌をかき混ぜる音が聞こえ、土日になると場外馬券売り場に大勢の人が集まり、ハッピーバレー競馬場、沙田競馬場の競馬を楽しんでいました。（香港の人は賭け事が大好き）

返還前ということもあり多くの人が不安を抱え、何人かの人々が海外（カナダ、オーストラリア等）への移住も考えていましたが、ほとんどの人が返還後香港へ戻ってきたようです。

押し並べて当時の庶民の生活ぶりは、質素で楽しく平和そのものという感じがしました。



2020年6月30日、香港国家安全維持法が成立し、即実行されました。この時をもって、香港の一国二制度は終わりを告げました。

但し多くの日本人は他人事だったようです。日本人は、幸せなことに、自由と民主主義にどっぷりとつかうことができているのです。自由は何なのか、民主主義とは何なのか、どうしてそれらを日本人が手に入れているのかなどのことを考える人は多くはないでしょう。

今でこそ、コロナ禍で海外に旅行することはなかなか難しいのですが、一昨年までは、いつでも、どこにでも行くことができました。

自由民主主義も、平和も、すべて私たちが物心ついた時からありました。それは空気と同じように、気にすることもなく、考えることもありませんでした。

しかし、それは非常に恵まれた国の人々にしか与えられていません。多くの国の人々は、それを求めて命をかけてきています。



今の香港人もそうでしょう。自由と民主主義と平和な生活のために命をかけていたのです。

しかし、その香港人も2020年6月までは自由に中国共産党や中国政府を批判することができ、（弾圧は加えられたが）一国二制度のすばらしさを味わっていたのです。それが一瞬にして奪われたのでした。

自由と民主主義は常に空気のようにあるわけではない。それは日本人とて同じである。自由と民主主義のある国の方が、これだけ発達した世界でも圧倒的に少ないのです。



日本の隣国である中国もそうでしょう。そこには13億人を超える民がいます。日本の人口の10倍以上です。

香港で何が起きているのか。自由を奪われるとは、民主主義を奪われるとはどういうことか。

私たちは目を背けてはいけなと思います。